

子ども・若者の居場所づくりガイド

network
つながり編

02

子ども・青少年の居場所づくりの推進について

神奈川県 福祉子どもみらい局 子どもみらい部 青少年課

04

居場所をつなぐネットワークから生まれる新たな可能性

玉川大学 学術研究所 教授 笹井 宏益さん

08

「繋がる力」の手渡し方

まちに「支え合い」の種子を蒔く

沖縄大学 名誉教授 加藤 彰彦さん

10

Voices

居場所が育てるネットワーク・つながり

人と人とのつながりが安心と生きがいを生み出す

共育ひろば 主宰 牧岡 英夫さん

子ども・若者の生きる力と地域を育てる居場所

NPO 法人アクションポート横浜 代表理事 高城 芳之さん

働楽（はたらっく）ワーカーズコープ 神奈川事業本部 鳴海 美和子さん

コミュニティカフェ メサ・グランデ 大澤 洋子さん

ずし子ども0円食堂 代表 草柳 ゆきあさん

20

第3回 子ども・若者の居場所づくりフォーラム

基調講演 奇跡をもたらすネットワーク！

“おせっかい”が繋ぐ 子ども×地域×社会

NPO 法人 豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク 理事長 栗林 知絵子さん

24

Q&A 登壇者への質問と回答

26

グループでディスカッションしよう！

28

知りたい・聞きたい・見つけたい

編集後記

過疎化が進んだ村が
地方の山間部に増える。

住民の半数以上が
六十五歳を超えた地域を
限界集落と呼ぶそうだ。

ますます高齢化する
地域社会の特徴として
時々耳にする。



イラスト・文：団 士郎さん Shiro Dan

公立児童相談機関、障害者相談機関の心理職 25年を経て、1998年に独立。
仕事場 D・A・N 主宰。立命館大学客員教授。全国で家族理解ワークショップ
や講演会を実施。

限界集落（出典：2018 木陰の物語 ゆるせる強さ）
youtube 版 木陰の物語 全 10 話

子ども・若者のために 居場所が育てる地域との ネットワーク・つながり

「孤立」という社会問題が、子どもや若者に及んでいます。
子ども・若者の孤立とは、頼る人がいない、又は人に頼れない状態をいいます。

周りに助けようとしている人や支援があってもアクセスできなかったり、その手を拒んでしまうことさえあります。

拒んでしまう理由はいろいろで、無気力・支援されたくない・人を信用できない・劣等感・屈辱感・主体性の欠如などさまざまです。

だからこそ、子どもや若者の健全な育ちや自立を支えるために、そして、子どもや若者の孤立を予防するためにも、身近な地域の「居場所」が必要なのです。

第3号ガイドでは「ネットワーク・つながり」をテーマにしました。

既に活動している居場所、これから創られようとしている居場所の皆さんに居場所と地域のネットワーク・つながりを育てていただきたいと考えたからです。

子ども時代にあってはならない孤立から子どもたちを救うことも、子どもの持っているチカラを存分に発揮し、生き生きとした大人への成長を導くことも、居場所単体でできることには限界があります。

社会全体で子ども・若者を育み、未来に可能性をつなぐために「居場所」からの発信で育てましょう。

地域とのネットワークを！つながりを！

都会に出た子ども達が、故郷に残した親をどうするかはもうずいぶん長く語られてきたテーマである。



子ども・青少年の 居場所づくりの推進 について

神奈川県 福祉子どもみらい局
子どもみらい部 青少年課

子ども・青少年が、家庭や地域の大人たちに支えられ、自らの持つ創造性やエネルギーを発揮しながら、たくましく生きる力と思いやりの心を持った人間へと成長することが大切です。

しかし、近年、孤立感や孤独感を抱えたり、自己肯定感が低下し、失敗を恐れ、何がしたいのかが分からずに社会への参加や自立に困難を感じる子ども・青少年が数多くいます。

そこで、すべての子ども・青少年が、様々な体験を通じて成長し、社会の中で、自立・参加・共生していく土台を育むには、子どもたちが遊べる環境づくりや、地域での居場所づくりなどが大切です。こうした取り組みを、学校、地域、関係機関等が連携し、

一体的に進めることで、子ども・青少年の成長と自立を支援する必要があります。

県は、子ども・青少年の健全育成と自立への支援を、県民全体の理解と協力と責任の下で進めていくための共通の道しるべとして「かながわ青少年育成・支援指針」を平成28年3月に策定しました。県は現在、この指針に基づき「青少年の健やかな成長を支え、自立・参加・共生をはぐくむ社会」の実現をめざし、総合的な取り組みを推進しています。

居場所づくりの推進については、平成28年度から、藤沢市との連携による新たな居場所づくりのモデル事業を実施してきました。(写真①)

このモデル事業を含め、居場所づくりを進めている団体などに参加を呼びかけ、情報交流・課題共有の場として「子ども・若者の居場所づくりフォーラム」(写真②)を実施してきました。このフォーラムでは、居場所づくり活動の普及とネットワークの促進を図ってきました。

そのほか、県の取り組みとして、生まれ育った環境によって左右されることがなく、すべての子どもたちが自分の将来に希望を持てる社会の実現を目指して、行政、経済

① 藤沢市との連携による居場所づくりモデル事業



収穫体験
(こども戸まるだい)



ある日のメニュー
(こども戸まるだい)



大学生と工作
(キッズ☆こもでい)



みんなで囲む食卓
(キッズ☆こもでい)

- **こども戸まるだい**
運営：NPO 法人 ぐるーぷ藤
- **キッズ☆こもでい**
運営：特定非営利活動法人 ワーカーズコープ

行政もこうした視点から
要援助対象者として、
山間部の高齢者を語る。



団体、関係団体、大学等による「かながわ子どものみらい応援団」を平成29年11月に立ち上げました。(写真③)

今後も、応援団の取り組みを通して、社会全体で子どもたちを応援する機運を醸成し、身近な地域での支援が、より一層広がるよう働きかけていきます。

子ども・青少年が安心して安全に過ごすことのできる地域の居場所づくりを推進するためには、行政の取り組みだけではなく、地域の住民や青少年支援・指導者、NPO、企業等、地域に関わるすべての皆様のご理解、ご協力が必要です。

「子ども・若者の居場所づくりガイド」(写真④)もさまざまな方の協力のもと作成してきました。3部構成からなるガイドですが、第1部の「導入編」では、今の子ども・若者たちが置かれた状況を、第2部の「対話編」では、地域に関わる皆様に、子ども・青少年の居場所における対話の重要性をご理解いただくことに重点を置いて作成しました。

そして、本ガイド「つながり編」では、導入編、対話編を踏まえ、子ども・青少年の育ちや自立を支える地域のネットワーク、つながりの重要性について記しました。導入編、対話編とともに活用していただくことで、居場所づくりに取り組んでいただく際の活動の一助になれば幸いです。

③かながわ子どものみらい応援団 ウェブサイト



県ホームページからご覧いただけます。

<http://www.pref.kanagawa.jp/docs/s4t/cnt/f536929/>

④子ども・若者の居場所づくりガイド



「導入編」2017.3 発行

「対話編」2018.3 発行

②子ども・若者の居場所づくりフォーラム (関連記事 P20-27)



しかしその老人は
本当にだれから
守られなければ
ならないだけの存在だろうか。



居場所をつなぐ ネットワークから生まれる 新たな可能性

玉川大学学術研究所

教授 笹井 宏益さん Hiromi Sasai



1 自立のプロセス

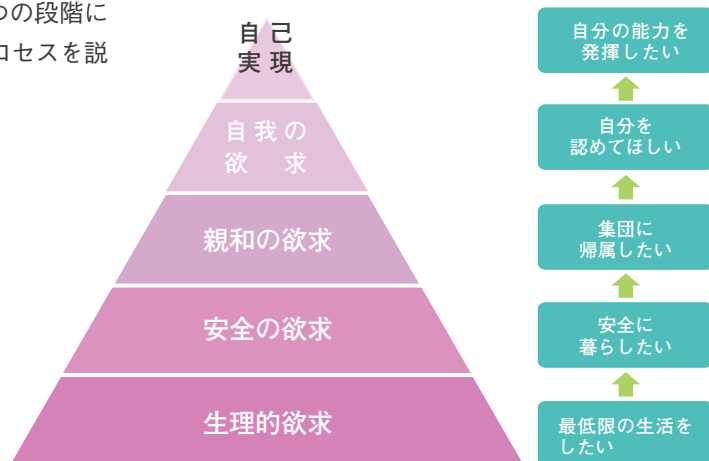
人間は、乳幼児期から幼児期にかけて、人間として基本的な生活を送る上での自立（自律）に向けた営みを始めます。その後、親・保護者、友人などさまざまな「他者」との関わり合いを通して社会的に自立し、さらに就職に向けて、また、就職後には一人の職業人として自立するように成長を遂げていきます。そうした成長発達のプロセスにおいて、一人ひとりが置かれた社会的状況のもとで、さまざまな葛藤や孤独感、無力感に陥ったりすることは、誰しも経験することです。

例えば、有名な A. マズローの欲求の5段階説においては、人間の持つ欲求を5つの段階に分けて、欲求に関わる人間の発達プロセスを説明しています（図表-1）。

この表において、生理的欲求から自我の欲求に至るまでの4つの欲求は欠乏欲求と呼ばれ、わかりやすく言えば「不足しているからそれを満たしたい」という欲求です。他方、それらの4つの欲求を満たした後に「自分らしく生きていこう」とする自己実現欲求は成長欲求とも呼ばれます。親和の欲求と自我の欲求は、生理的欲求や安全の欲求のような「モノを獲得したい・所有したい」という欲求とは異なり、精神的な充実感を求める欲求と言えます。

すなわち、親和の欲求とは、孤独や疎外された状態を避けたり、家族や会社の同僚、友人たちの集団に参加してその一員として皆と仲良く

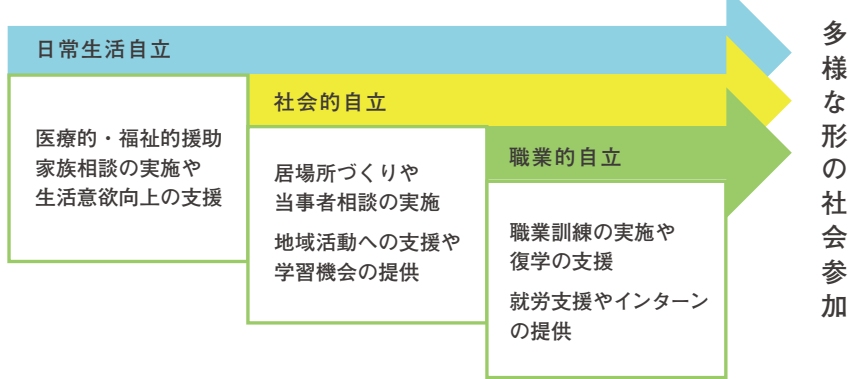
若い世代にとって、生まれ育った土地に居続ける親が、心配の種というのはいまの本当なのだろうか？



図表-1 マズローの欲求の5段階説

出典：マズローの心理学（フランク・コーブル著、小口忠彦監訳、1972年）を参照して筆者が作成

図表-2 自立に向けてのサポートについて



出典：2014年10月に岡山市で開催された「ESD推進のための公民館-CLC国際会議～地域で学び共につくる持続可能な社会～」における井口啓太郎氏（国立市公民館主事）ほかによる発表資料をもとに筆者が一部修正した

なりたいという欲求であり、また、自我の欲求とは、周りにいる人（他者）から認めてもらいたい、評価してもらいたい、自分の生き方に納得したいという欲求です。これらは「他者との関わり合いの中での自分自身の存在確認」に関わる欲求と言っても良いでしょう。

このように考えると、人間が自立（自律）的に生きていく上で「居場所」とはなくてはならないものであることが分かります。人間は、安心して他者（社会）と接点が持てる場があってこそ自らの心を開き、仲間を作ることができます。また、そうした場において他者と対等に関わり合うことで、自らのアイデンティティを培い、他者を受け容れ共生することができるようになるのです。

しかしながら、その一方で、実際には、世代や性別、地域を問わず、多くの人が「居場所」を失っているのが現状です。その背景には、社会の変化に伴って、他者と関わるができる空間が乏しくなり、関わり合う時間や仲間も少なくなっている実態があります。また、都市化やサービス産業化が進み、コミュニティ自体の衰退や孤独化が進展していることなども挙げられます。もう一つ付け加えると、大人は教育する側で子どもは教育される側であるという大人たちの思い込みが、大人と子どもの社会的役割を固定化し、相互の関係を序列的で不自由なものにしていることも挙げられます。

2 自立に向けてのサポート

図表-2は人間の自立に向けてのプロセスをモデル的に示したものです。ここに示したように「社会的自立」の段階において、居場所は不可欠なものです。もし多くの人たちが居場所を失っているのであれば、さまざまな形の第三者によるサポートが必要になります。実際に、人々の自立をサポートするため、市民や行政によって「居場所づくり」などさまざまな取り組みが行われています。図表-2に掲げたとおり、居場所づくりは、社会的自立のみならず、職業的自立を遂げる上でも基盤となる取り組みです。

3 居場所の役割

居場所は、人間の親和の欲求と自我の欲求を満たすものでなければなりません。そこでは、安心できる空間の共有とともに、その場にいる



人同士による対話的なコミュニケーションの創出が求められます。居場所は「ホッとできる場」であると同時に「ワクワクする場」でなければならないのです。

居場所がそこに集う人たちに「ホッとしてもらおう場」であるためには、まず自己完結的になることが必要です。なぜならば、外部からの刺激や関係性を遮断することで、その場に対話可能な空間と時間が生まれるからです。そうした中で対話型のコミュニケーションが生まれてくるのですが、居場所が「ホッとする」のみならず「ワクワクする」場になるためには、その場でのコミュニケーションが創造的な性格を持つこと、すなわち対話的コミュニケーションが広がりや深まりを持つことが必要になります。

これによって、人々の興味・関心を高めるような情報が居場所に生成・伝達され、葛藤や孤独に悩む人々にとっては、専門的な知見に接したり新しい人と交流したりすることができるようになります。

居場所には、自己完結的であり、ときには開放的であり得るような、相矛盾する2つの役割が求められているのです。

4 連携協力の特徴

ここで、少し見方を変えてみましょう。「連携協力」とはどのようなものをさすのでしょうか。

図表-3 なぜ連携協力が必要なのか

サポートが必要な人に対して各セクターの長所や専門性を活かした対応が可能になる

サポートが必要な人に関わる情報を共有することになり、一貫した対応が可能になる

画一的な対応ではなく、当事者の抱える課題に個別具体的に対応することが可能になる

サポート活動をつうじて、セクター同士のつながりが広がったり深まったりしやすくなる

一般的に言って、連携協力には次のような特徴があると考えられます。

- (1) 制度的に定められた役割（を持つセクター）同士の結び付きではなく、アドホック※でボランティアーな意思に基づいた機能的な結び付きである。
- (2) 連携協力を構成する各セクターは異質な文化を持つ（同質の文化を持たない）ものの、課題解決の方向については共有する。
- (3) 当事者同士を結びつける際の「接着剤」は、上下の序列関係や対価の提供ではなく、双方が（連携協力が）メリットだと感じることである。
- (4) 互いに他の活動を補完する機能を持つ。
- (5) 会社組織や行政組織に見られるような縦割りの指揮命令系統や役割の固定化がない。

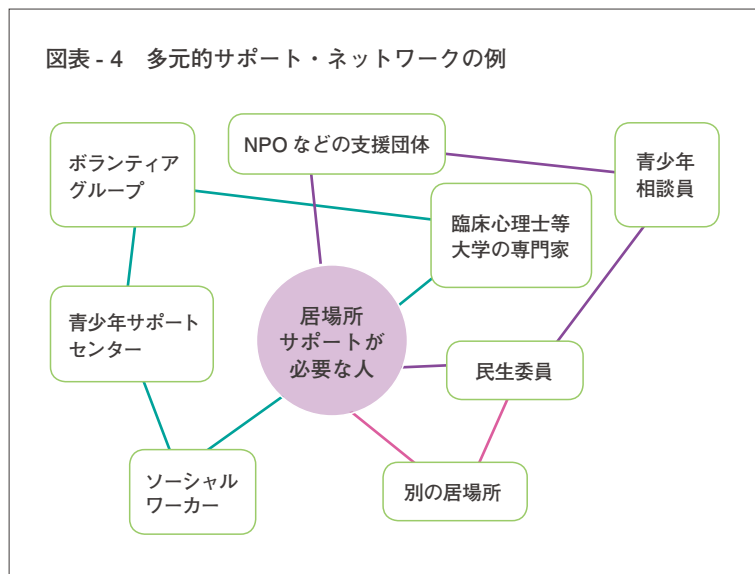
このような特徴を見ると、連携協力は、通常の企業組織や行政組織における結び付きとはかなり異なる性格を持っていることが理解される

※アドホック：特定の目的のための



経済的に厳しい母子世帯などは、新たな相手を探して都市をさまようことが少なくなる。

図表-4 多面的サポート・ネットワークの例



と思います。それは、共有する課題の解決に向けて、各セクターが対等な立場で協力し合うことで、互いに自分ができないところを他のセクターが補ってくれ、その結果、共有する課題の解決が進展する、という機能を持っているのです。連携協力のメリットをまとめると、図表-3のように整理できます。

5 居場所のネットワーク化

図表-4は、居場所において、他者との関係や社会参加に関して葛藤や孤独など悩みを抱えている人が、さまざまな機関・団体・個人からサポートを受けることで社会的自立を確かなものにしていくためのネットワークを例示的に示したものです。ここで示されているように、居場所というのは、帰属欲求や承認欲求を満足させ自立を促してくれる場ですが、居場所とは別のアプローチで、そうした役割・機能を果たしてくれたり、相談に乗ってくれたりするところは他にもあります。

それは、行政機関やNPOが運営している施設であったり、ソーシャルワーカーや社会事業家などであったり、さまざまな形が考えられます。

それゆえ、自立をサポートすることをミッションとする機関や団体などが、自らが所在する地域

において、普段から連携協力を旨とするネットワークを作っておくことが重要です。ここには「居場所」も含まれます。

こうしたネットワークにおいて、各セクターの役割は固定的なものではありません。課題の内容等に応じてメンバーが変わったり、アプローチが重なったりすることが重要なことです。肝心なことは、課題解決に向けてのアプローチを固定化せず、課題の内容等を真摯に受け止め、それに見合ったサポートを関係する機関や団体などが

提供することです。

専門家やボランティア組織も含めこのようなネットワークを作っておくことによって、必要なセクターが情報を共有でき、課題の解決に向けて多面的・重層的なサポートを適時・適切に提供することができるようになります。

PROFILE

笹井 宏益

1956年千葉県生まれ。文部省、文化庁、神奈川県庁等に行政職員として勤務後、北海道大学助教授。国立教育研究所 生涯学習研究部 生涯学習体系研究室長、国立教育政策研究所 生涯学習政策研究部 総括研究官を経て現在に至る。生涯学習政策や社会教育政策の構造分析を中心に、幅広く生涯学習の研究、特に、トピックスとして、リカレント教育、ボランティア・NPO、アートマネジメントに関心があり、社会調査の方法を駆使し、研究課題に取り組んでいる。

家族の不安定さが
もたらす問題や事件も
後を絶たない。



「繋がる力」の 手渡し方

まさに「支え合い」の種子を蒔く

沖縄大学 名誉教授

加藤 彰彦さん

Akihiko Kato



PROFILE

小学校教諭、横浜市立寿生活館（ソーシャルワーカー）、児童相談所（児童福祉司）を経て、1991年より横浜市立大学国際文化学部人間科学科教授。2002年からは沖縄大学人文学部福祉文化科学科教授、子ども文化学科教授を歴任、2010年に沖縄大学学長に就任。2014年3月に沖縄大学を退官され、現在は、神奈川に活動の拠点を置きつつ、沖縄でも精力的にご活躍中。「野本三吉」のペンネームで著書多数。

千葉県野田市で小学4年生の少女が親によって虐待死させられるという痛ましい事件が報道され、多くの人がなぜと自問し、どうしたらよいのかと考えていると思う。

また2015年2月には、川崎市の多摩川の河川敷で中学1年生の少年が仲間によって殺害されるという悲しい事件もあった。

こうした事件があるたびに、罰則を強化し、取り締まりを強め、加害者への非難が声高に語られ、その背景にまでなかなか目が届かないのが現状。

そんな時、いつも思い出すのが、阪神・淡路大震災の後につくられた「市民がつくる復興計画」（1998年）（※）の一節である。

「震災によって、人間は一人では生きていけないという当たり前のことを身をもって知った。生活の再建もここにあるのではないか。……私たちは議論の過程で<自立>という言葉を分かり易く言い換えると何であるかを考えた。いろいろな意見の中で<支え合う>ではないか、という発言があった。

<支え合う>は、どうしても支えている側か支えられている姿かの片方を思ってしまう。

しかし、今支えられている人もかつては支える側にいたに違いない。

この場所では支えているが、別のところでは支えられることもあろう。……一瞬、一瞬にとらわれず時間と場所の視点を広くとって眺めれば、人は互いに<支え合う>関係を続けてきたし、続けなければいけない。

それが一人ひとりにとって<自立>ではないか。震災で学んだ最大のものは、地域コミュニティの大切さ

※『阪神大震災市民がつくる復興計画—私たちにできること』

著・出版：市民とNGOの「防災」国際フォーラム実行委員会（1998年）

一方
何処にも
行き場のなくなった時
無条件で迎えてくれる
だろうと思える故郷。



であり、そこで繰り広げられた支え合いであった。」

ぼくはこの「<自立>とは<支え合う>こと」という文章は、これからの時代を生きていく人間にとって<基本的な視点>を提示していると思っている。

その思いを抱きながら、ぼくは2002年に沖縄にわたり、そこで「子ども・若者たち」を中心に据えたコミュニティづくりの活動に参加させてもらった。

中でも「沖縄市こどものまち推進プラン」の作成に関わった経験は大きい。

沖縄市は、全国の市町村の中で最も子どもの割合が大きい市であり、なおかつ基地のまちのため、さまざまな課題も抱えた地域でもあった。まず、克明な子どもの実態調査が行われ、次のような課題が浮かび上がってきた。

「地域コミュニティの衰退」「遊びの変容」「大人とこどものギャップ」「生活格差と生活の二極化」「子育て環境（自然体験の減少とメディア情報の増加）の悪化」など、沖縄市だけでない現代的な課題も見えてきたのであった。その上で、子どもの声を直接聴くという作業が行われたのだった。

その結果、「応える」「支える」「変わる」という3つのコンセプトが見えてきたのであった。

まず子どもたちからのさまざまなメッセージに対して<応える>他者の存在があって、子どもたちはその<応答関係>を通して、自己肯定感を育て「自立する力（支え合う力）」を育てていくことができること。

また、現実の社会のさまざまな歪みや重圧、閉塞感の中で苦しんでいる子どもたちを<支える>他者の存在があって、困難を乗り越えることができるということ。

そのためには、個人が支えることは難しいので、仲間や市民（団体）、行政や専門機関などさまざまな力を借り、協働しながら課題を解決していくことが必要になる。

そうした中で、大人自身が<変わる>ことにぼくも気づかされたのである。

大人が子どもを保護し指導してだけでなく、共に地域を創っていく仲間として子どもを見ていくという<子ども観>の変容がここにはあると気付いたのである。それは大人自身の内に秘められていた<子ども性>を解放する作業でもあった。

それは、大人自身もまた、仲間を受け入れられ、共に育っていく存在であると気付くことでもあった。沖縄市の「こどものまち構想」は、「人づくり」「場づくり」「ネットワークづくり」を目標にして「子どものまち、未来づくり条例」づくりにまで進んだのだが、市議会ではわずか1票の差で否決され、実現することはできなかったが、ほぼ同じ流れで沖縄県が故翁長雄志知事のもとで、実態調査に基づく政策づくりを続け、その後を継いだ玉城デニー知事によって「沖縄子ども応援条例（仮称）」の提案がされようとしている。子どもにやさしいまちは、全ての人にとってやさしいまち。まず大人が手を取り合い、「支え合い（ネットワーク）」の姿と種子を蒔くことから、<繋がり合う力>が手渡しされ、コミュニティが創られていくと思う。



Book



〈繋がる力〉の手渡し方：
離陸の思想、着地の思想
単行本 - 2017年
株現代書館



まちに暮らしの種子を蒔く
-いま、この時代を生き抜くために
(SQ選書15) 単行本 - 2018年
株社会評論社

再出発のため、
しばしの潜伏を
黙ってさせてくれそうな故郷。





居場所が育てる ネットワーク・つながり

子どもや若者にとって必要な居場所とは…。
居心地がよくて安心感のある居場所。
育ちや自立を促すために、さまざまな人に出
会い、体験ができる開放的な居場所。
より良い居場所を実現するために、居場所
の活動者が認識していなくてはならないこ
とは？
単体の居場所だけで解決できないことはな
いのだろうか？
そんな時、居場所は何かあったら課題を乗り
越えられるのでしょうか？

心の中が変わることなく
在り続けるものを
もう要らないと言えるだろうか。



人と人とのつながりが 安心と生きがいを生み出す

子どもと家族の生活に寄り添い、
共に生きることができる地域に

「地域の寺子屋」活動と A 子ちゃんのこと

「地域の寺子屋」活動

川崎市では、4年前から市内小学校区単位に放
課後学習支援・子ども支援の活動「地域の寺子屋」
を行っています。私の地域の B 小学校では、2
～6年生対象に、毎水曜日放課後 90 分を目安に、
宿題と国語算数のミニ学習、その後にゲーム、伝
承遊び、工作遊びなどを行います。スタッフは教
員 OB や子育て支援活動に関心のある方々が中心
ですが、学区内住民の参加も増えています。学習
指導はできないけど学習後の遊びに関わる方、「と
にかく子どもが好き」と参加される方動機はさま
ざまです。

A 子ちゃんとの出会い

「地域の寺子屋」の申し込みは4月に学校を通
じてします。A 子ちゃんは2年生で参加。初回か
ら緊張する様子もなく、会場の図書室に入るとラ
ンドセルを投げ出し無目的に動き回ります。「宿
題は？」とスタッフが聞くと「宿題なんかやらな
い!」。ランドセルの中を見ると、教科書・ノート・
鉛筆はなく空っぽ状態。他の子どもたちが宿題を
する横で書棚の本を手にするものの短時間で投げ
出します。遊びの時間に一緒に遊ぼうと誘っても、
長続きしません。夏休みまでそうした状態が続き
ました。「どう対応したらいいの?」「他の子ども



ともい
共育ひろば 主宰 牧岡 英夫さん Hideo Makioka

1975年から2003年まで地域福祉施設「川崎愛泉ホーム」でコミュニティワーカーとして在職中に、母と幼児の自主保育活動、学童保育、小学生・中学生のサークル活動等で、障害児と一般児童がともに過ごす活動を経験。愛泉ホーム退職後、「共育ひろば」を川崎区内に立ち上げ、学童保育を軸に拠点を活用しながら高齢者の居場所としても機能させるなど、現在も地域福祉の第一線で活動している。

たちの邪魔になってしまう」「寺子屋活動で担える子どもではないのでは？」などスタッフは困惑しました。そこで、A子ちゃんに主に関わるスタッフを設け、かつ、他の子どもたちと特に隔てることなく関わることを意識するようになりました。子どもたちのなかには「なんでA子ちゃんだけ宿題や勉強しなくていいの！」などと言われながら。しかし、この対応で、夏休み前には、スタッフがついていれば、興味のある本読みが、少しできるようになってきました。

A子ちゃんにとって必要な居場所

夏休みは、地域で夏祭り・納涼盆踊りが町内会単位で行われています。そこで親に連れられて遊びに来ているA子ちゃんに数回出会いました。親と一緒にスーパーに買い物に来ているところにも出会いました。A子ちゃんはスタッフに気づくと声をかけてくれました。

ある日公園で、A子ちゃんが、激しく親から怒鳴り声でなじられていました。様子を目にしたスタッフは、「あれじゃA子ちゃん可哀そう」「寺子屋がA子ちゃんにとって安心な場所になれば、それだけでもいいのかも」と、A子ちゃんにとっての寺子屋の意味を他のスタッフと共に改めて考えました。A子ちゃんと同じ地域に住むスタッフがいたからこそその発見であり、その発見によって、地域の「寄り添いを必要としている子」の姿が見えてきたのです。

関係性によって育つA子ちゃん

夏休み明け、寺子屋でA子ちゃんは「盆踊りで会ったよね」などとスタッフと嬉しげに話しました。間もなく「宿題の国語の音読聞いて」と求めてくるようになり、スタッフが一緒にいれば、参加している子どもたちと共に過ごせる時間も長くなっていきました。「座ってられる時間が長くなってきたね」とスタッフの皆がA子ちゃんの変化を共有しました。

上級生の紙芝居遊びにも関心を持つようになりましたが離れたところで観ています。紙芝居を読む音読の力がないのです。一緒にはできません。スタッフは、A子ちゃんに、好きな紙芝居を探してもらい聞き役になり、ふりがなを指でたどって読む紙芝居遊びをしました。とても時間はかかりつつも、最後まで読み切るようになりました。間もなくしてA子ちゃんはスタッフ個人の名前を覚えて「今日…さん いないの？」と聞くようになったのです。

自分のことを語るようになったA子ちゃん

A子ちゃんのランドセルの中に教科書・ノートが入るようになってきました。音読だけしかやらなかった宿題に算数も加わりました。



自身の自宅を改装した“共育ひろば”は、近所の子どもたちが気兼ねなく立ち寄れる居場所になっている。

学習に取り組むときのスタッフは、Hさん、Iさんと決めました。二人がいないときには、宿題をやらうとしません。しっかり自分に寄り添ってくれる安心できる関係になっていたのでしょうか。紙芝居遊びは、特定のスタッフの独占から、読み手を友達と順番にすることもできるようになり、寺子屋の中で友達との関係も広がりました。そんな中で、寺子屋終了時間後、他の子どもたちが帰っても残っていることが出てきました。「家に帰っても誰もいない」と家の様子を語り、母父のことを話すことが多くなります。「昨日夜帰ってきて、お父さんとお母さんがけんかして、お父さんが…」など、A子ちゃんの不安な気持ちが見えてきます。スタッフ会では、そうした言葉をどう受け止めるのか話し合いました。

A子ちゃんの様子・言葉から、スタッフも、寺子屋活動の意味・目指すところ、価値を確認し、活動を続けていくモチベーションを得られたように思います。

もつれる人との関係に寄り添う

A子ちゃんは、宿題プリントの「ここが分からない。教えて」と声をかけてくるようになりました。

3年生に進級したA子ちゃんは、寺子屋終了後、一層、一人残りスタッフとおしゃべりをしたい風ですが、寺子屋をしばらく休んでいた友達を連れて来たり、「とてもきれいな字が書けるようになったね…」と漢字書き取りをほめると「2年の時はやらなかったけど、3年生になってきちんとやることにしたの」と応えます。七夕の願い事には「みんなとなかよくできますように」と書き、友達やスタッフ、さまざまな人との関係が豊かになっていました。

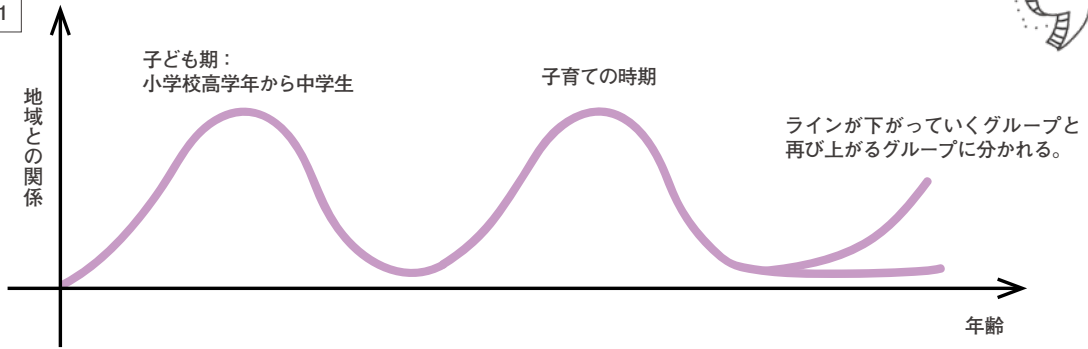
しかし、周りとの関係が増えてくれば、その関係がもつれることも起こります。「変なんだよ、この子」とA子ちゃんに対する批判的な言葉を、A子ちゃんの目の前で友達が発します。「いじめ」「排除」に発展しそうな気配を感じることもありました。

10月のある日、A子ちゃんがランドセルを足で蹴り押しながら寺子屋に姿を見せ、テーブルに着くことなく、宿題も出さず、絵本を読んでいます。読んでいる風はなく眺めているだけのようでした。同級生が言葉をかけるのですが、その言葉は攻撃的です。やがてそれはエスカレートしてけんか状態になり、A子ちゃんは、その場を走りさり、自分の教室の教壇下に隠れるようにしていました。追いかけたスタッフが、「なぜ、ここにいるの?」と聞くと、「嫌な気持ちになったとき、ここにいるといいよ」と担任の先生に言われたと応えてくれました。人と関係すれば、いろいろなことが起こります。きっと寺子屋以外の時間にもそんなことが起こっているのでしょうか。でもその時に、人と人との関係性のもつれをほぐし、「大丈

それを維持し続けてくれている人が、次世代にとって、心配の種ではないことなどあるのだろうか。



図-1



夫?」「大丈夫!」と寄り添ってくれる誰かが、必要なのだと思います。

居場所を離れても広がる地域での人との関係

3年生学年末、A子ちゃんは「寺子屋に4年生になっても来たい」「ママは夜も仕事をしていて忙しいから申込書を書けない」と訴えました。「申込書もらったら、名前だけでも書いてってお願いしてごらん」と伝え、担任から親に連絡を取ってもらって、何とか継続することができました。

この時期、新たにスタッフのNさんが加わりました。Nさんは、将棋が得意です。A子ちゃんは、Nさんから本将棋を教えてもらいます。Nさんは「とても覚えが早い、コマの動かし方などすぐに理解できています」とA子ちゃんの将棋の様子を話してくださいました。A子ちゃんは嬉しくて「今日Nさん来ている?」といます。A子ちゃんにとって、新しい人の関係が増えました。Nさんが、寺子屋以外で将棋を教えている地域の公民館や町内会館に、A子ちゃんを誘うと、なんと一人で参加しました。3ヶ月もすると、周りで子どもたちが指しているのをのぞきながら口を出してくるまでになっていました。

5年の進級時、また「親が寺子屋の申込書を書いてくれない」と言っていました。そして、この時は、ついに申込みには至りませんでした。しかしA子ちゃんは、寺子屋の会場をのぞきにきて、スタッフに声をかけたり、手を振るなどして帰って行きます。街中で会うと寄ってきて挨拶を交わします。

暮らしの中で培われるネットワーク

(1) ライフサイクルとコミュニティタッチメント

30年程前、住民の生活意識調査で、住民と地域との関係を数量化したグラフ(図-1)になった報告を目にする機会がありました。

横軸は年齢軸です。右にいくほど年齢を重ねていくことになります。縦軸は地元地域と関係性の度合いを示しています。

誕生し、成長につれて、保育園・幼稚園などで地域の友達が増え、小学校入学してさらに友達・地域のつながりが広がっていきます。青年期になると行動生活圏は広がっていきますが、地元地域との関係性の密度は相対的に薄いものになって、地域外に興味・関心・行動の重心が移っていきます。

進学・就職・結婚などで転居があれば地元と呼ばれる“場”は移動していくことも起こりますが、移動先の“場(地域)”で、我が子の子育て期には、再び地域のつながりの機会が増えます。そして子育て期が過ぎるにつれて、地元地域のつながりは“遠い”ものになっていく様子を、このラインは表しています。

見知らぬ土地の
たまたま見つけた
賃貸マンションで、
昨日、今日の現実の断片を
かき集めたところで、
薄っぺらな未来しか
手に入らないのは当然だ。



地域福祉施設での私の勤務経験から、このラインは老年期に二つに分かれていくような気がします。上に向かうラインは、子育てが終わる・リタイアするなど時間ができ、再び地域活動や趣味仲間などの活動に時間を過ごすことが広がっていく姿です。一方、下に向かってしまう方々にも少なからず出会ってきました。ご近所付き合いなども遠くなり、社会的孤立といわれる姿に象徴されるものです。

「ネットワーク」を「つながり」と翻訳するならば、上に向かうラインは、ネットワークが豊かに広がっていく姿であり、下に向かうそれはネットワークが失われていく姿といえるでしょう。

(2) 人との関係性を伸ばし、増やしていくこと

ラインの変化を、ラインの主人公＝住民一人ひとりの地域関係・生活上の関係性の変化で考えてみます。

子どもは、親との関係性だけの乳児時期から、地域の中に関係性を増やしていきます。ごく家の周り、限られた周辺で作られていた関係は、成長につれてより遠くに広がっていきます。関係の数を増やしながらか、関係は地域の外へ広がって伸びていくことを示しています(図-2)。

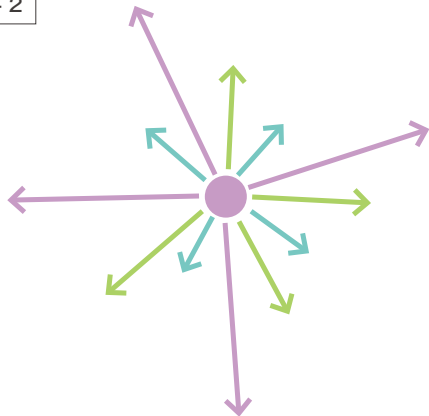
ところが、関係を伸ばしていく場面で何らかの障害、困難に出会うと人間関係に「不安」を覚え、伸ばしていくことを拒否することで「不安」から逃れ、自分を守るということが起こってしまうように思います。

居場所で支援をするということは、その関係を伸ばしていくことに寄り添い、支えることではないでしょうか。

ここに人間の深い絆が
生まれる余地などない。



図-2



居場所とは 住民ができるネットワークとは

「居場所」とは特定の物理的な空間だけではないような気がします。スタートやきっかけは、特定の空間であっても、そこでできた関係性が、生活する空間の中に広がっていくことによって、「居場所」もまた広がります。だからこそ安心して関係性を増やして行くことができる「居場所」であることが求められるのではないのでしょうか。「居場所」とは、まずは小さな安心できる場であること。次に、人の関係を増やしていくことに寄り添い、支える場だと思います。

また、「居場所」の支援者たちにとっても、子どもや若者たちを、支えることの意味や喜びを確かめ合える場でもあることが大切です。

町の中で住民が作り、拓いていくネットワークは、その日までのインフォーマル・フォーマルな「つながり」を手がかりに、協働して、安心・居心地がよく、気遣いが交わされる空間と考えていたいと思います。

川崎市の施策として提案された「地域の寺子屋活動」で、それまでの地域の中でのつながり「線」が、スタッフと参加する子どもたちの間で再構成されて、それが再び地域の中に返されていくのは、同じ町に住み地域・生活圏を重ね合っている地域住民だからこそできるネットワークであると感じています。

TALK SESSION



NPO 法人アクションポート横浜
代表理事 高城 芳之さん



働楽（はたらっく）ワーカーズコープ
神奈川事業本部 鳴海 美和子さん



コミュニティカフェ メサ・グランデ
大澤 洋子さん



ずし子ども0円食堂
代表 草柳 ゆきゑさん

子ども・若者の生きる力 と地域を育てる居場所

**つながり（ネットワーク）が生み出す力は
無限大！**

— 子どもや若者が求める人とのつながりって？

高城 僕は、高校時代までは、コミュニケーションをあまり取るような生徒ではなかったんですよ。大学に入ってから、ボランティアを通して地域の大人の人と関わるようになったんですけど、その時、思ったんです「こんなに話を聴いてくれる大人がいるんだ」って。

大澤 そういう気付き、ありますよね。

私、学生時代、とくに目立たない子どもだったかもしれないけど、生活の中で、認められてるって実感薄いから、なんとなく生きづらかったような気がします。そんな時、通っていたピアノの先生が褒めてくれて、うれしかったことを覚えています。

それから、カギをなくして困っていた私に声をかけてくれた近所の人のことなんかが、とっても記憶にあるんです。

鳴海 いろいろな人に出うこと、話すことが大事なんじゃないかな。私は、福祉的な活動は高齢者介護からだったんですけど、様々な高

齢者と関わってみると、「高齢期の生きやすさ」を左右するのは、子どもの頃からの地域とのつながりだって気付いたんです。同じ地域に暮らし続けることを前提にした地域とのつながりじゃなくて、どこで暮らしていても地域とつながっていることで生きやすくなるんです。

草柳 私は、若いころに幼児教育の仕事をしていたんですけど、子どもにとっては、「人との関係のなかでいろいろな経験」をしていくことが必要だと思うんです。そして、その時に、大いに失敗も経験する（笑）。どうしたら良かったんだろうとあれこれ考えるから、社会性が育つんだと思うんです。そういう場が、今日の社会に必要なんだろうと思います。

— 居場所は「生きる力」を育てる場

鳴海 私は子どものころ体育だけが得意な子どもだったんですよ（笑）全然、優秀じゃなかったけど生きにくくはなかった。

時間をかけて
育まれたものの中に
存在する故郷。





生きる力って学力じゃないですよ。

今、私は学習支援の活動をしているんですけど、なんとか高校に入学してもやめてしまう子どもがいます。い

ろいろ理由はあるわけだけど、中学までは義務教育だからみんな行く。でも、高校は行っても行かなくてもいい。勉強にそれほど興味がなくても、優秀でなくても、学校に行き続ける子どもは、友達との関係性を持っている子のように思います。そこまでに、人との関係を通していろいろの経験をしている子どもは、大変なこともあるけど、期待も持っていて頑張る力を続けて持つことができます。

高城 そうですよ。学校生活の中では、学力しか評価されてなかったように思います。だから、失敗が許されないし、閉塞感がある。

鳴海 今日の社会には、家庭の問題・学校の問題・地域にだっていろいろな問題があると思う。だけど、子ども達の生きる力は社会全体で育てないといけないと思うんです。

「人に助けを求められる力」も「嫌なこと嫌って言える力」も「未来に希望を持つ力も」みんな生きる力。

草柳 そうですよ。私が子ども食堂やっても、提供するのとは決して「食」だけじゃないと思っています。特に心を育てることが大

切。実際、私が民生委員としても関わっていた子どもに、親が離婚、祖父母と暮らしていたけれど祖母も認知症になり、食事といえば、いつも菓子パン。この子自身も軽度の知的障害があって、通っていた高校は遠いから近所に友達もいない。地域のなかで、孤立しちゃいますよね。

私は、うちの前を通過って駅に向かう彼に、卒業までお弁当を作り続けました。でも、それは、私が民生委員だったから知ることになった子どもだし、個人で支え続けることも難しいこと。でも子ども食堂っていう場所があることで、地域のさまざまな子どもを知ることができる。

子どもそれぞれに、どんな生きる力を育てたらいいか気付くことができると思っています。



大澤 本当にそうです

ね。先日、ぐらす・かわさきのもう一つの拠点の“遊友ひろば”というスペースで、書初め大会をしたんです。いつもの友達や支援者と一緒でも、書道教室じゃないから自由な感じだし、すっかり、みんな墨だらけになっちゃって大変でしたが「こういうの楽しい！」って子どもたちが言ってくれて、彼らのいつもと違う一面も見られました。

“メサグランデ”は、子どもに特化した居場所じゃないし、地域活動支援センターでもあるから障害のある人もない人も、たくさん人がいる場所なんです。それだけでも、いろんな出会いがあって、いろんな人の生きる力が育っているかもしれない。“ぐらす・かわさき”の中に親子広場とか寺子屋事業とか、いくつものテーマの活動があるから、その中でいろんな人が人のつながりをいっぱい作っていくといいと思っています。

高城 僕は、ボランティア活動の場所で、奥さ

鬱陶しいような
しながらも含んでいるのは
当然のことだが、



んも見つけてますからね(笑)。

居場所って、なんていうか、フォルダ分けした活動とか、話題とか、限定したものにならないことが大事ですよ。恋愛の話だってできるし、バイトの悩みだって話しあえるし…みたいな、今の生活のなかの出来事を共有したり、時には、アドバイスしたり、してもらったり、そんなところであることが大事なんだと思います。また、そういう場所である「安心感」も作らないとダメなんです。

一 居場所の支援者ってどんな人？

大澤 現代の大人は、子どもや若者について、人間関係が希薄って思っている人が多いように思うけど、こういう活動をしてみて、私は、そうとは言えない。ちゃんと人との関係がある子ども、ちょっとしたチャンスさえあれば、豊かな関係を作れる子どもたくさんいる。

子どもたちのことを大人の物差しで考えないって大事なことだと思います。

鳴海 子どもたちに対して、どんな形でも、あまり感情むき出しの接し方はよくないですよ。関係性をつくれないうすもの。

私は、今の大人が子どもの健康な心を育て導きの方法を持たない人が多いように思うんです。高城さんがフォルダ分けした支援じゃなくて…って言われたし、大澤さんが、書初めでみんな墨だらけになった子どもの話をされたけど、子どもの全部を受け止めて接することができる人が必要なんだって思います。

高城 鳴海さんが言っている感情むき出しになることとは違うけど、支援者も自分を出せるといいですよ。例えば、職場も、職員一人ひとりが、困っていることを自然に言える職場



は強いんじゃないかと思うんです。今の時代、困っていることがいっぱいあっても、尚、やりたいこと実現できるようにすることが必要。そのためには、困りごとも含めて想いを分かち合うことが大切なわけで、そういう意味では、支援者同士も、居場所でどんなことをしたいかっていう希望もですが、その中での迷いや不安も出し合えることが大事だと思います。結構、負のことをみんなで共有できるって、レベルが高いと思うんです。

鳴海 それから、子どもに対する支援者は子どもだけじゃなくて、家庭とか家族についても気に留めることだと思います。小さいころから何か課題を抱えている子は、家庭の中でそれを見逃していることが多いように思います。

あるいは、気付いても、親は、我が子を分身的に考えてしまって、自分がこう考えるからこういう対処がいいだろうと子どもに押し付けてしまう。

そうすると、課題はずっと解決しないままになって、家ではいい子、だけど、社会ではうまくいかないなんてことも起こってしまう。

そんなことがあるということを知りながら、子どもが、どんな環境で育っているのか関心を持つことが必要だと思います。

大澤 それでも気付けない家庭はあると思います。

私は、ずっと会社員をしながら娘を育ててきたんですけど、手がかからない娘だっただけに、気付いていないこともあったかなと思います。

今、NPOで働くようになって、また、子ども食堂の活動を



これが大都会で心細く暮らす次世代の支えになっていないはずがない。





通して、いろいろな子どもを観ていて、食事の仕方一つとっても家庭の様子が見えるんだなってつくづく思います。

核家族の中で、しかも、共働きも多い中、子どもの想いに気付くこと、時にはSOSに気付くのは社会の役割でもありますよね。

高城 そうですよ。いってみれば、子どもたちは、みんなが親の予備軍。僕の取り組みは、若者との関係の中で、「人生をどのように生きていくのか」みんな対話しながら、それぞれが見いだせると良いと思っているんですけど、より良く生きることの中には、職業もあるけれど、どんな家族をつくるのかとか、どんな子育てをするのかも入ってくる。こういうことを考えることが「キャリア教育」で、とても今の時代必要なんだと思うんです。だからこそ、子どもだけじゃない、子どもを育てている保護者や家庭についても、支援者は関心を持つ必要がありますね。

一 居場所に求められるネットワークとは

草柳 私自身は、幼稚園や保育園の職員だったこと、民生委員であること、食生活改善委員であること、趣味がダンスでダンスも教えていること、子ども食堂をやっていること、ずっと逗子に住み続けていること、いろいろな立場で地域とのつながりを持っています。種類はどうあれ、地域に暮らす人たちは、生活の中でいろいろなつながりを無意識に持っていることが既にネットワークになっているんだと思うんです。これを個人が活かしていくこと大事じゃないかしら。私は、どれも続けてこられてよかったなと思っています。

大澤 私は、3年前、会社員時代に、川崎市と専修大学が協働で行ったソーシャルビジネスを学ぶ社会人講座を受講したことで、現在のNPOに入職することになったのですが、そこでの学びで、企業が、自社の利益だけでなく、社会貢献が求められていることなど、様々なことを知ったんです。居場所に求められる支援者も、子どもたちのことのみでなく地域社会の今を知っている必要があると思います。そのためには、そういう情報を得るための大学とか行政等、さまざまなネットワークがあるといいですよ。

見えないというだけで、そのことを見失ってはいないか？





鳴海 私は、子ども・若者のさまざまな支援活動をする中で、どうやって彼らを支えたら良いか知りたかった。

そんな時出会った、さまざまな先駆者の方々は今でもありがたいつながりです。高校の中に居場所をつくり、生徒のさまざまな悩みや課題に寄り添い解決を模索してこられている元田奈高校の金沢先生、沖縄大学の加藤先生、教えて頂いたこと、励まされたことがたくさんあります。

高城 今行っている取り組みは、決して、僕の組織だけではできず、若者たちの自立を応援する志のある大学の先生たちや、NPOの皆さんとも一緒に頑張ろうと連携・協働の姿勢と実践をしてくださっているのが、成り立っています。組織間のつながりも大事ですが、やっぱり、成し遂げようとするに対して共感し、互いに役割と責任をもってつながることが、大切で価値あることだと思います。

こうした取り組みは、子ども・若者を直接的に支えるだけでなく、支えられる社会を創ることでもあるんだと思います。僕や皆さんのような活動が地域にあることで、子ども・若者を育てる力のある社会ができるのではないのでしょうか。

PROFILE

NPO 法人アクションポート横浜
代表理事 高城 芳之さん Yoshiyuki Takajo

社会課題に取り組む NPO がチカラを発揮するには人や組織とのつながりが必要。また、そのつながりの中に、次世代を担う若者の参加が不可欠と考え、若者たちとの継続的な対話と行動を続ける。企業や NPO、大学とのネットワークを組みながら、豊かな発想によるさまざまな事業を作り出している。

働楽（はたらっく） ワークスコープ
神奈川事業本部 鳴海 美和子さん Miwako Narumi

自立就労支援プロジェクトリーダー
証券会社の社員だったバブル期に経済的な豊かさを感じながら「働くということ」を考えるようになる。結婚後、ヘルパー免許取得。地域密着型のデイケアの仕事を通じて人々の暮らし、地域のニーズがみえてくる。中学生から高齢者までの就労支援は、地域社会のさまざまなネットワークを構築しながら実動中。

コミュニティカフェ メサ・グランデ
大澤 洋子さん Yoko Osawa

ソーシャルビジネスを学ぶ社会人講座の受講をきっかけに NPO 法人ぐらすかわさき入職。同法人のソーシャルビジネス支援事業を通じて地域の居場所づくりを応援している。メサ・グランデが毎月開催している「地域食堂めさみる+」の運営も担当し「食」を通じた地域コミュニティづくりにも取り組んでいる。ネットワークは多様に拡大中。

ずし子ども0円食堂
代表 草柳 ゆきゑさん Yukie Kusayanagi

幼稚園教諭・保育士として 30 年前仕事をしていたころと、家庭も地域も大きく変化するなか、食生活改善推進委員として民生委員として逗子で活動を続けている。子どもたちが幸せを感じながら育ててほしいと願い、地域でばったり会った子どもや保護者にもう一声の声かけを心掛け、心のつながりを深める活動をしている。

都市部の高齢者達よりずっと、
ネットワーク豊かに過ごしている
田舎の老人達は多い。



第1部 基調講演

奇跡をもたらすネットワーク！

“おせっかい”が繋ぐ
子ども×地域×社会

NPO 法人 豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク

理事長 栗林 知絵子さん

「遊ばせたい」の気持ちがかきかけ

奇跡をもたらすネットワークというテーマですが、私達が何をやっているかという、地域でやってみたくを、小さい事ですけど、みんなで実現していく。これがつながる中で、さまざまなネットワークができていきました。誰が計画を立てて、誰がリーダーになって、作ったものではありません。みんなで考え、みんなでつながってできたものです。

私の初めの一步はプレイパークですね。神奈川県にもずいぶんプレイパークがあると聞いております。



私は昭和41年生まれです。私が子どもだった時は、街自体がプレイパークでした。学校から帰ってくると近所の子どもが路地だったり空地だったり集まって、子ども同士で遊んでいました。そういう中で私は生まれ育って、いっぱいいろんな人におせっかいさ

れて、大きくなって、東京へ出て、池袋で嫁ぎ、そして子どもを産みました。

子どもを産んでみると、豊島区には公園がありません。土もないんですね。こんなところでどうやって、私のように、“いっぱい遊んだ”という経験を自分の子どもにさせてあげられるのだろうかと思いました。そんな時に、豊島区が事業としてプレイパークを作りました。自治会から動員がかけられ、私は自分の子どものために参加する。こんなふうプレイパークの青写真ができていったんですね。

見えないけれども“いる”

実際にプレイパークができてみると、活動に関わるのは私だけでした。立ち上げに関わった自治会の皆さんは会議には出てきますが、直接プレイパークに足を運んで子ども達と話したり一緒に遊んだりする人達がいなかったんです。

私はそこで色々な子ども達に出会いました。大人はプレリーダーが2人と私ぐらいしかいませんので、子ども達は私とも色々な話をします。そんな中、「昨日からご飯食べていない」って子や「引っ越して来る前は車の中で住んでたんだよ」っていう子もいることに気がきました。すごい傷のついた携帯ゲーム機を私に見せて「この傷はママが酔っ払って包丁を突き刺した跡だよ」とか。そんなことを吐露してくる子がいたんです。私の知らないような環境で暮らしている子ども達がこの街にいらんだと感じました。そんな子ども達との出会いや、たまたまニュー



若い発想と、
最近の理屈だけで
世の中のことを語ってしまうと、
穴だらけなことを見落とす。

栗林 知絵子 Chieko Kuribayashi

東京都豊島区在住。6人家族で大学生、高校生の男児2人の母。2004年より池袋本町プレーパークの運営に携わる。自他共に認める「おせっかいおばさん」で、地域のおせっかいさんをつなげ、子どもの居場所を点在化することを目指している。民生委員児童委員。



スで見かけた年越し派遣村で知った貧困問題から、社会で起きている問題のしわ寄せを子ども達が受けているのではないかと思うようになったんです。

そんな頃でした。プレイパークにいつも来ている中3の男の子が、「俺、高校行けないかもしれないんだ。学校の先生がお前は都立高校に行けないって、そう言うんだ」と私に言ったんです。

私にとって、プレイパークの子ども達みんなが自分の子どもと同じようにかわいいです。「ねえ、くりばぁ」って私に声をかけてくれる。そんな子どもから、学校に行けないかもと言われて「そうなんだ、しょうがないね」とは言えませんでした。「勉強したいんだったらこれからだって間に合うよ。する場所がないなら、うちにおいでよ」って言っちゃったんです。そこから、うちで毎日学習支援が始まりました。

その男の子がうちに来るようになって「自分の家は母子家庭で、勉強は小数点の足し算と分数の意味が分からない」そう話してくれました。そして、お母さんは昼も夜も仕事なので、毎日渡される500円で弁当を買って、一人で夜ご飯を食べていることも聞きました。

私が子どもの時は、スーパーは夜閉まってしまうし、食堂もコンビニもない時代です。子どもが家でご飯を食べるのは当たり前でした。でも今は、少額でもお金があれば、食事ができてしまう。毎日一人でお弁当を食べるのが普通で、家族みんなでご飯を食べるなんて気持ち悪い、という子が、見えなけれど“いる”ということがわかりました。

その男の子は塾にも行けていないけど、私は高校に行くために模擬試験を受けてほしかったんです。だけど、お母さんに連絡しても、連絡をくれません。

そこで私は地域のママ友、親子読書会、子どものPTAの友達、いろんな人達に、彼の応援をしてほしいと千円のカンパを募りました。私から声をかけられた親友や友達、先輩ママは「この地域に塾に行けないとか、高校に行けないなんて子がいるわけがないでしょ」って言いました。「いやいや。いるんです」という話をした途端に「そういう子がいるならもちろん応援するわよ」と、塾代のカンパをいただき、受験寸前には地域の塾で模擬試験を受け、そして高校に合格したんです。

つながりはじめたネットワーク

2012年に、厚生労働省が子どもの相対的貧困率が7人に1人という数値を発表しました。自分の地域の子ともと貧困がつながっていると何となく思っていたけれど、この厚生労働省の発表に、この街にはもっといっぱいいるのかもしれないと思い

主役は降りて、裏方に回りながら、息子、娘達の、心の支えを維持し続けているのが限界集落の老人達だ。





学習支援には、小学生から高校生、外国籍の子どもたちも参加



学習支援の大学生が企画した音楽会

ました。そうしてできたのが、この「豊島子どもWAKUWAKU ネットワーク」です。

集まるきっかけになったのは、塾代をカンパしてもらった人達を呼んで、受験の報告会をしたこと。その時の私には、なんの青写真もありません。ただ、こうして一人の子どものために、皆さんが集まってくださった。だったらこの地域の人達で、この地域の見えない問題に何ができるか考えようよ。つながろうよ、と。

ネットワークを作った後に、何ができるかなあ？と考えました。皆で集まって、いろんな活動を知り、勉強もしました。その中で生まれたのが、誰もが来られる学習支援。高校に行けないかもと言ったあの男の子は、中学3年生だけど実は小数点の足し算が分からなかった。もし、分からないところの勉強を支えてあげられていれば、その子は違う高校にいて、将来が変わっていたかもしれない。それならば、小学生も来られる居場所を作ろうとなったのです。

そして、もう一つ始めたのが、子ども食堂です。お母さんが一生懸命働いていて、家族でご飯を食べることができない。あたたかい手作りのご飯を食べられない子が、この街にいるんだったら、地域

で団らんのを作ればいい。そんな思いで始めました。

外国籍の子と親を助けてくれる人。子ども達とやってみたいことを提案してくれる大学生。子ども食堂のお手伝いに来る80代の元気なおばあちゃん。始めた学習支援や子ども食堂にはたくさんの人が集まり、各々のやってみたいことを実践します。

こうして、子ども達のためならと、いろんな人達が手を組むことで、子ども達の環境が豊かになっていくんです。

この活動は池袋だけではなく、豊島区全域の子どもに支援が無ければ意味がない。そこで、いろんな人達に声を掛け、区や社協の力を借りながら、子ども食堂ネットワーク、遊びネットワーク、学習支援ネットワーク、外国籍の子どものための多文化ネットワークなどを作り、点在化してきた居場所をつなげています。さらに、豊島区にいる子ども若者支援ワーカー、ソーシャルワーカーが、生活保護家庭の子ども達をアウトリーチしています。孤立している家庭の子ども達を引っ張り出して、地域につなぐ。そうして私達がつながると、地域の人でおせっかいします。その子どもの暮らしを、育ちを、彼らが大きくなるまでずっと見守ります。

多忙な子ども達は、
時間的にも
経済的にも
厳しいなら



「子ども・若者の居場所づくりフォーラム」当日の様子



フードパントリーの様子



さまざまな食品や生活用品を持ち帰ってもらう

ネットワークが生み出した連携

夏休みは給食がないから、フードバンクの食材を送っています。でも、りんごや卵、牛乳、お肉は送れない。こういったものも渡せるようにできないかと、子ども食堂ネットワーク、学習支援ネットワークなど、いろんなネットワークの人達と、食材を提供できる仕組みを考えました。行政、社協、企業、いろんなところとつながってできたのが、「フードパントリー※」です。行政が協力してくれて、困窮家庭、ひとり親家庭全てにチラシを配ってもらいました。子ども食堂、学習支援、企業が商談する事務所をお借りして作った会場に大量の食材を持っていき、申込をした方にとりに来てもらいます。牛乳やお米、化粧品、おむつまで。スーツケースとか自転車まで来てもらって、大量に持って帰ってもらいます。

こういう場があるとお母さん達は、いらぬ服を持ち寄るなどして、お母さん同士の交流を始めます。子ども達の暮らしを一番近くで支えるのは親です。親に仲間ができ、悩み事を話せ、誰かが私達のことを考えてくれている、と実際に体験することによって、親達もやってみたいことを話すようになるんです。

このパントリーは、地域のさまざまなネットワークがあるからこそ、できる取り組みです。

このように、地域の点在化した居場所がネットワークでつながれば、何か課題が出てみんな集まって解決できる。ネットワークがさまざまにあることによって、地域にいろんなコミュニティ、つながりが生まれてきます。

ネットワークがいくらできても、子どもにつなが人がいないといけません。でも、ネットワークをつくり、居場所づくりをしていると、だんだんアンテ

ナができて、子ども達の様子が見えてきて、つながるようになります。おせっかいさんが街に増えていく。そうすることで、困難を抱える子どもだけでなく全ての子どもを豊かにし、更に、こうして多くの大人に大切にされた子ども達が地域に戻ってきます。

今いろんな企業などが取り組んでいる「SDGs」、2030年までに世界で持続可能な社会を作るために掲げられた目標があります。貧困をなくすとか、飢餓をなくすなどさまざまありますが、これらは世界で解決しようと思ったらそう簡単には解決できません。

しかし、地域の中で人が動いて地域の中でネットワークを作っていくことによって、各地域で持続可能な地域を作っていけるんじゃないでしょうか。この目標の中のひとつ「パートナーシップで目標を達成しよう」。いろんなネットワークができていき、必要な課題があれば、企業も行政も市民も皆、パートナーシップを組んで、コラボレーションして、解決していく。これが私達のやっている活動の意味です。

つながって、やりたいことをやることによって社会を変えていく。それは実は今日集まった皆さん一人ひとりにかかっているんじゃないかなって思います。

※フードパントリー:企業などから提出してもらった食料品を必要な人に渡すための「食の中継地点」



無理矢理
親孝行のまねごとのような
帰省などしなくてもよい。



私たちのネットワーク

活動報告者：

ずし子ども0円食堂 代表 草柳 ゆきささん
 コミュニティカフェ メサ・グランデ 大澤 洋子さん
 働楽(はたらっく) ワーカーズコープ 神奈川事業本部 鳴海 美和子さん
 NPO 法人アクションポート横浜 代表理事 高城 芳之さん

Q & A

登壇者への 質問と回答

子ども食堂の周知に、認知症(予防)の啓発のイベントへ出店したことが目からウロコでした。そのイベントを選んだ理由を教えてください。



オレンジフェスティバルのことで すね。オレンジ色は認知症予防と子どもの虐待予防運動をアピールしています。「ずし子ども0円食堂」に出店の誘いがありました。私たちが周知活動の一環としてオレンジ鍋を考案し参加することにしました。大好評で完売しました。

支援者がなかなか集まらない中、ボランティアさんに担ってもらうことの限界について、有償とするなど、どのような対応をしましたか。



人件費を含めた経費を賄うために、行政の委託事業や補助金を活用しています。事業が継続され、若いスタッフが実力をつけて団体運営の主力へと成長する反面、事業に邁進するあまり「団体の理念がどこかへ置き去りになってしまったのでは?」と考えさせられることもあります。それでも、例えば“地域食堂めさみー+”ではボランティアが活躍しています。交通費なしの無償ですが、ボランティアをしたい!という人が集まっています。

多様な入口から社会参加し、自ら課題を見つけて活動していくことはステキです。何かきっかけづくりをする時、その先、何につながるか考えてしまいます。入口が広がると、化学変化は起きますか?



もちろん、団体として何につながるか、きっかけ作りの先に何を果たしたいかという想いが大事だと思います。僕は中間支援ですので、きっかけや入口を作り、個々のNPOや地域に還元するのが仕事です。入口が広がると、情報が入ってきます。人やスキルの情報、普段は接しない企業の情報、NPOや地域課題の情報などなどです。それによって、より効果的な活動が運営できること、一つの事業ではなく、他の事業にも応用できることなど、メリットはたくさんあります。

協同労働は出資も伴うとのことですが、出資のできない若者や貧困状況の方には、協同労働は難しくないでしょうか?



生活が困窮しているなどで出資が難しい方は、分割や協同労働により出資できるようになってからなど、その人にあった方法を取ることもできます。

でも考えてみるといい。





子ども食堂の情報が、本当に必要な子どもに伝わりにくいと聞くこともあります。情報を届けるための工夫などありましたらお聞かせください。

「仕事をつくり出す」とのことですが、地域の仕事と競合してしまい受け入れてもらえないことはないのでしょうか？



毎回、チラシを開催地区の保育園、学校に配布しています。主任児童委員は困り感や支援が必要な家庭の情報を共有していますので、日常生活や学校生活の中でその子たちへ、きっかけ作り、お節介に、努力しています。人口6万人足らずの小さな市ですので成果を出せていると思います。



競合する、ということは仕事を取られた、と思われてしまうことですね。協同労働では、地域が必要とする仕事を創っていきます。こちらとしては競合しないと思っても、相手企業は違うかもしれません。その時は訪問して、私たちが理解してもらい「力を貸してください」と伝えています。

また、地域懇談会を10回以上行い、企業の方にも来てもらい、一緒にやっていきたいことを伝え、ネットワークを創ります。企業同士の支え合いですね。

丁寧にやる必要があるので、仕事づくりに1年や2年かかることもあります。

企業への協賛をお願いする際に心掛けていることやコツはありますか？
また、その際、企業との「ツテ」は必要でしょうか？飛び込みなどの経験はありますか？



飛び込みもツテでの依頼もいろいろやってきました。もちろん、正解はありませんが、NPOにはNPOの、企業には企業のコミュニケーション・ネットワークがあると思いますので、今は企業の方に企業向けの営業のサポートをしてもらっています。

まずは知り合いの企業に協賛を獲得する営業サポートをお願いしてみるのも良いかもしれません。

子ども食堂へ来る子どもの行き帰りの安全確保はどのように行っていますか？



一番心配している事です。保険には加入していますが、安全が補償されているわけではないので、これまで何事もなかった事に感謝しています。

ひきこもりの方は、外へ出ること自体が大きなハードルかと思います。どのような働きかけをしていますか。自宅訪問などのアウトリーチをすることはありますか？また、家族に対する支援は、どのようにしていますか。



まず相談者から状況をお聞きします。同時に、本人への対応として、就労体験など、考えられる限りの対応を用意してからアクションをします。ひきこもりの方は、具体案があったほうが外に出やすくなるので、「これはどうですか」と対応していきます。アウトリーチも行います。これにより親からも外出を促されることもあり、まず一度来てもらうことにつなげます。親が困難な状況にあると、子ども困難な状況にあることが多く、その場合は、家庭環境を整えることから始めますが、本人への支援も同時に行っていきます。



グループでディスカッションしよう！

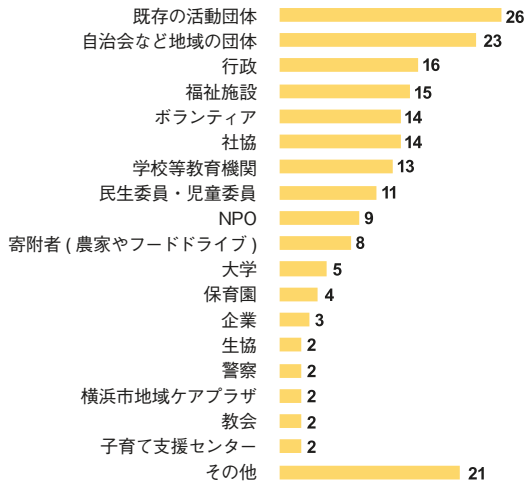
ファシリテーター：佐塚 玲子さん（NPO 法人よこはま地域福祉研究センター）

コメンテーター：草柳 ゆきゑさん・大澤 洋子さん・鳴海 美和子さん・高城 芳之さん

Talk 1

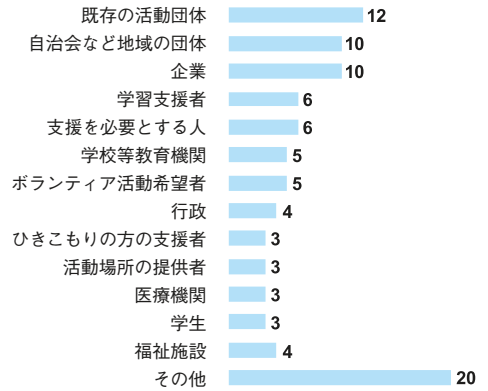
あるつながり・ほしいけどないつながり

あるつながり (n=192)



その他>療育センター、保護司、更生施設関係者、ケアマネジャー、弁護士、コミュニティソーシャルワーカー、活動場所の提供者、企画の運営者、家族、周知活動協力者

ほしいけどないつながり (n=94)

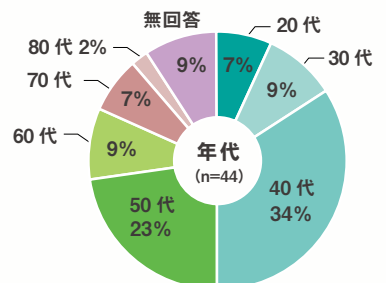
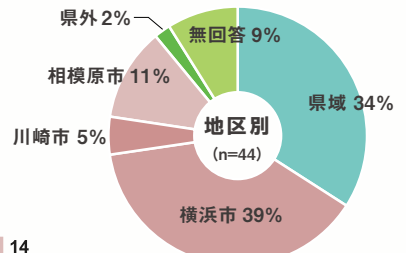
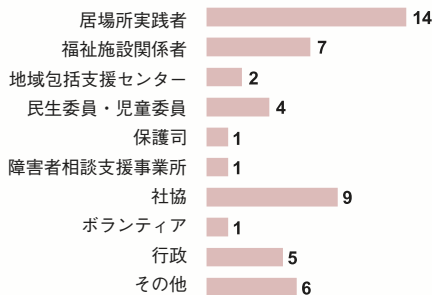


その他>児童養護施設等退所者の支援者、NPO、民生委員・児童委員、社協、新しい担い手、生活困窮者の支援者、スクールソーシャルワーカー、周知活動協力者

アンケート回答者の概要

参加者 63名・回答者 44名
(回収率 70%)

所属（※複数回答可） 単位：人



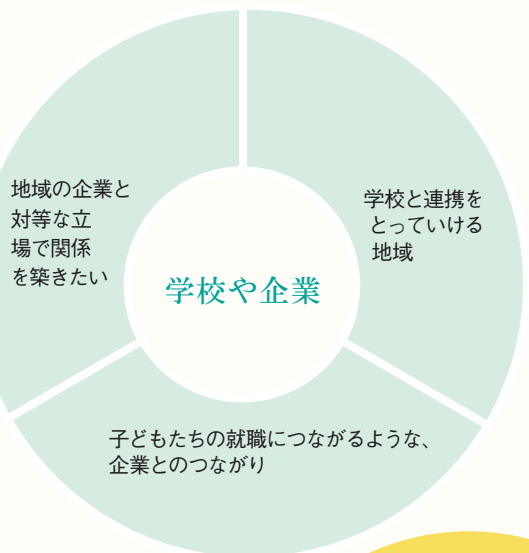
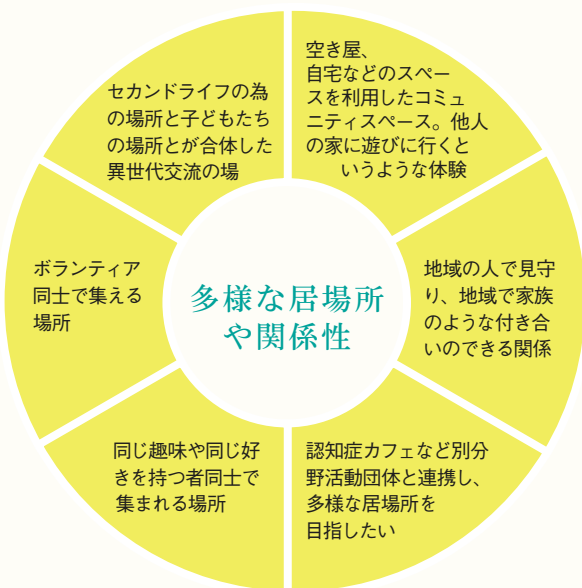
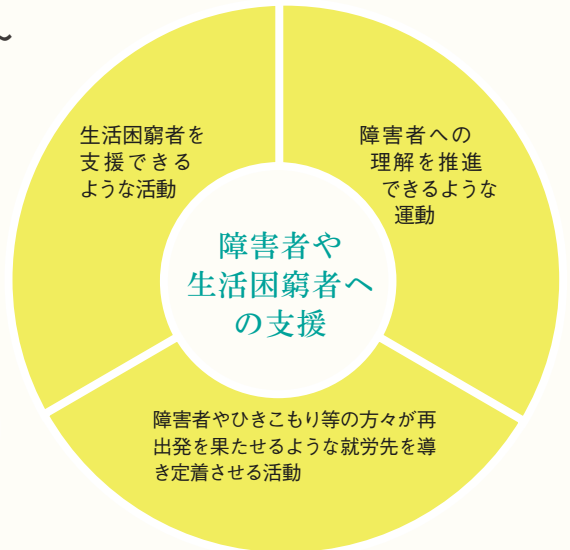
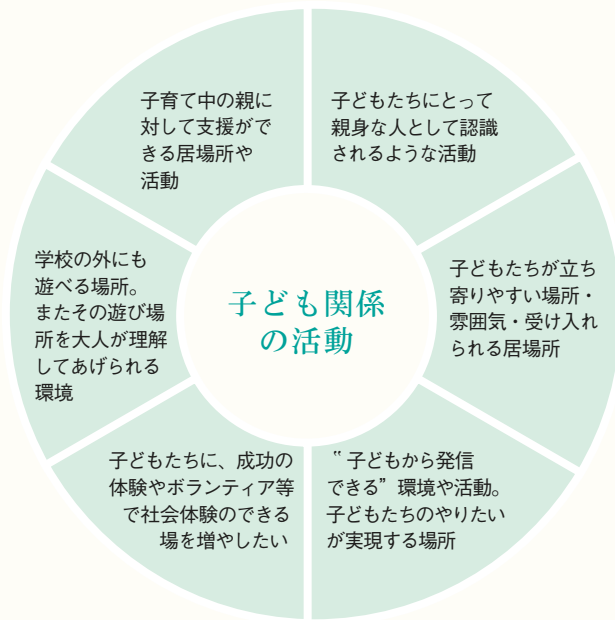
建て売り業者が突然作り上げた町を、故郷のように感じて年を重ねられるのか？





**Talk
2**

**ネットワークがあるからこそ実現する
地域の子どもの育ちと自立**
～ネットワークによって実現したいこと！～



自分の立っている場所の下に
どれだけの人々の時間が
積み重なっているかを
想像することは大切だ。



知りたい ・ 聞きたい ・ 見つけたい

子ども・若者を対象とした居場所の運営をしている方、これからしてみたいと考えている方に向けて、地域にあるネットワーク等の URL を一部ですが参考にご紹介します。(神奈川県ホームページ掲載の PDF 版ではクリックでリンク先が表示されます) 2019年3月現在



WEB

- **かながわ子どものみらい応援団** (神奈川県福祉子どもみらい局)
<http://www.pref.kanagawa.jp/docs/s4t/cnt/f536929/>
セミナー・イベント情報、活動を支援する基金の情報などを紹介しています。
- **地域の子どもの居場所** (横浜市こども青少年局)
<http://www.city.yokohama.lg.jp/kodomo/kikaku/chiiki-kodomo-ibasho/>
地域の取り組みや相談窓口、ガイドブックなどについて「探す」「手伝う・支援する」「新しく作る」などから探すことができます。
※4月からURLが変更となる予定です。4月以降は **地域 子どもの居場所 横浜市** で検索してください。
- **地域の寺子屋事業** (川崎市教育委員会)
<http://www.city.kawasaki.jp/880/category/10-14-0-0-0-0-0-0-0.html>
地域の寺子屋事業 (学習支援、体験学習、世代間交流など) について紹介しています。
- **かわさき福祉情報サイトふくみみ** (川崎市社会福祉協議会)
<http://k-fukumimi.com/index.html>
福祉に関するセミナー情報や子ども食堂などの活動団体、勉強会の講師などを探すことができます。
- **地域の皆さんが主体となった子どもの居場所づくり** (相模原市)
<http://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/kurashi/seisyonen/1014043.html>
地域の子ども食堂、学習支援の取り組みや相談窓口について紹介しています。
- **子どもの居場所総合相談窓口** (相模原市社会福祉協議会)
<http://www.sagamiharashishakyo.or.jp/ibasyodukuri.html>
子ども食堂などの子どもの居場所づくりを応援する総合相談窓口を開設しています。
- **こども食堂ネットワーク** (こども食堂ネットワーク事務局)
<http://kodomoshokudou-network.com/index.html>
子ども食堂について「食べたい人」「手伝いたい人」それぞれの案内と「作りたい人」では、各地域の行政が出しているマニュアルなどを見ることができます。
- **横浜こども食堂ネットワーク**
<https://www.facebook.com/yokohama.kodomoshokudou.network/>
横浜市内で「こども食堂」を実践する人たちをゆるやかにつなぐネットワークのページです。
- **かわさきこども食堂ネットワーク**
<https://kawasaki-kodomoshokudo-nw.jimdofree.com/>
川崎市内の子ども食堂を運営する団体が集まり、子ども食堂に行きたい人、これから始めたい人への協力の思いから設立しています。

学習支援や子ども食堂などの居場所を作りたい!

居場所をやっている中で、課題が見えてきた。他のグループはどうしているのかな?



相談先として

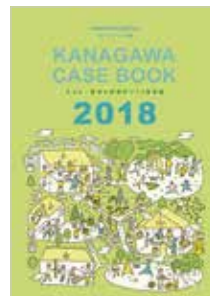
社会福祉協議会

各市区町村に1カ所ずつあります。地域の福祉ニーズや生活課題について、関係者で協議しながら地域づくりを進める民間の団体です。地域の社会福祉施設、民生委員児童委員、地区社会福祉協議会、当事者団体とのかわりも深く、活動を通じたつながりづくりも支えます。



BOOK

子ども・若者の居場所づくり事例集



発行：社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会
2017年) http://www.knsyk.jp/s/shiru/pdf/jirei2017_full.pdf
2018年) http://www.knsyk.jp/s/shiru/pdf/jirei2018_full.pdf



それを見えない人は、
永遠の根無し草で、
その時の風に翻弄されるしかない。



特定非営利活動法人
よこはま地域福祉研究センター
センター長 佐塚 玲子
役職員一同



子どもから若者という、成長段階・社会との関係性も異なる世代の広さ、子ども・若者が直面する現代的課題の複雑・多様性に直面し、県民の皆さんに活用される「居場所づくりガイド」をどのように制作すべきか悩みました。「ガイド」ですから、居場所とは何か？また、居場所づくりの方法等が、明確に示される必要があるだろうと考えるとより一層悩みは深まりました。

一方、本事業が始まってから出会った多くの居場所は、活動の内容・仕組み全てが個性が高く、より良い居場所にしていくための対話を続け、地域との協働が活発に行われ、居場所として成長途上にあるように観えました。それを受け、本ガイドは3つのテーマで編集することにしました。

導入編は多様な居場所が生まれることの大切さを、対話編では、コミュニケーションの現代的課題を踏まえたうえでの居場所における重要性を、つながり編では、居場所と地域社会とのネットワークとし、3つの視点を持った居場所が誕生することを願いガイドとしました。

「子ども・若者の居場所づくりガイド」導入編 (introduction)・対話編 (communication)・つながり編 (network) の3冊の制作にあたっては、多くの居場所活動者の皆さまはじめ研究者の方々・神奈川県・(福) 神奈川県社会福祉協議会・(福) 神奈川県共同募金会など本当にお世話になりました。編集後記の場をお借りして厚く感謝申し上げます。

社会福祉法人
神奈川県社会福祉協議会
会長 篠原 正治
地域福祉推進担当職員一同
企画調整・情報提供担当職員一同



「制度では対応できないことでも居場所を受け止めることで子ども・若者の生活が変わってくる。たくさんの関係機関や地域の人々が一緒に汗をかくことの大切さを実感しています」。居場所実践者の言葉です。

今回のガイドは「つながり編」。みんなで「つながり」行動することが、子ども・若者への豊かな支援へ、その支援がさらに地域づくりへ「つながって」いきます。

本会が (N) よこはま地域福祉研究センター、(福) 神奈川県共同募金会と三者協働で「子ども・若者の育ちや自立を支える協働事業」に取り組み、県の「子ども・青少年の居場所づくり推進事業」を受託し、3年目となりました。今後も、子ども・若者の課題から地域全体の支え合いを目指し、情報提供や支援者同士が出会う場を作っていきたい。そして、本県につながりづくりの輪が広がることを夢見ています。

社会福祉法人神奈川県共同募金会
会長 並木 裕之
役職員一同



赤い羽根・共同募金運動は、地域の中で誰もが安心して暮らしていくことのできる社会を目指して、1947年から70年余に渡り、その時々に必要なとされる福祉活動を資金面で支えてきました。

近年、国際社会の中でも、地球上で誰一人も取り残さない社会の実現を目指す世界共通の目標「SDGs (持続可能な開発目標)」が、2015年に国連サミットで採択されました。日本でも2016年にこの目標を達成するための指針が策定され、国の機関を中心にさまざまな分野・業界が連携した取り組みが開始されました。

2016年。時を同じく、(N) よこはま地域福祉研究センター、(福) 神奈川県社会福祉協議会、(福) 神奈川県共同募金会の三者は、近年の社会情勢を背景に「子ども・若者の育ちや自立を支える協働事業」を開始しました。この事業は、SDGsが掲げる17の開発目標の中の貧困や保健福祉に関連した目標達成のひとつの取り組みとして、グローバルな視点でも重要な位置付けであると考えられます。

今回のテーマは「つながり (ネットワーク)」。この活動を通じて、福祉業界はもとより異業種間のネットワークがさらに広がり、未来を担う子ども・若者の良き社会環境が、世界レベルで構築される一助となることを願っています。

今後の予定

- 2019年秋
子ども・若者の居場所づくり事例集
3号発行
- 2019年秋以降
第4回 子ども・若者の居場所づくり
フォーラム開催

「限界集落」などという言葉は、学術用語のようで、実はただの流行語に過ぎないのではないかとと思う。



子ども・若者の居場所づくりガイド **つながり編**
network

.....
神奈川県委託「子ども・青少年の居場所づくり推進事業」

企画・制作・発行：社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会・特定非営利活動法人 よこはま地域福祉研究センター

協力：社会福祉法人 神奈川県共同募金会

発行：平成 31 年 3 月